「ソフラン アロマリッチ」を刷新、新香調も追加

ライオン

ライオンは10月7日、「アロマカプセル」配合で生まれたての香りが1日中つづく高残香タイプ衣料用柔軟仕上剤「ソフラン アロマリッチ」（本体＝600㎖、つめかえ用＝450㎖）を改良するとともに、ロイヤルローズアロマの香りの新香調「ダイアナ」を新たに品揃えして発売する。また、柔軟仕上剤と同じ香りが楽しめる香りづけ剤「ソフラン アロマリッチ香りのミスト」（本体＝200㎖、つめかえ用＝180㎖）のパッケージデザインをリニューアルし、「ダイアナの香り」を追加して発売する。いずれもオープン価格。

同社の調査によると、柔軟剤市場の中でも高残香タイプが2014年は前年比9％増と依然として拡大しており、香りづけスプレータイプも2014年は前年比17％増と市場が伸長している。

高残香タイプの柔軟剤使用者では、洗濯のたびに毎回柔軟剤を使用する人や、2種類以上を使用する人が多く、一人当たりの購入量が増加傾向にあることから、高残香タイプ市場は拡大を続けることが予想される一方、生活者は柔軟剤の香りに「ほどよい強さの香りが長く続くこと」を求めている。

また、同じ銘柄を使い続けることが少なく、新しい香りを試す人が多いことから、購入の際に「香りの種類が多いこと」や「新しい香りの品揃えがあること」を重視している。

今回は、そうしたニーズを満たすため、ほどよい強さの香りへ改良するとともに、新香調を追加することによりラインナップ拡充と鮮度アップを図った。

新香調「ダイアナ」は、華やかで凛とした女性をイメージしたロイヤルローズアロマの香りで、イングリッシュローズを、フランボワーズやベンゾイン（安息香）のさりげなくパウダリーな甘さでフワッと包み込んだ、一度出逢ったら忘れられなくなる香りとなっている。

資生堂

TSUBAKIに新アウトバストリートメントラインを投入

資生堂は、「髪と地肌をWケアする」をブランドコンセプトに今年3月に一新した「TSUBAKI」より、髪と地肌のWケアをさらに体感するラインナップとして、「ダメージケアウオーター」をはじめとしたアウトバストリートメントライン（6品目8品種、オープン価格）補修」であり、選択時に重視する点としては「仕上がりの手触り」がどの剤型においても共通で№1となっている。

そこで今回は、ダメージ補修効果の高いオイルを超極小化して、高い補修機能と持続機能を叶える「浸透ナノ補修オイル技術」を、アウトバストリートメント全品に搭載した。また、毛髪柔軟・保湿効果のある「椿麹GL」をヘアケアアイテムに配合。何度も触りたくなるような、至福のなめらかな手触りを叶えたという。

さらに、シャンプー・コンディショナーで採用した、花びらを表現したフォルムをアウトバストリートメントにも展開。ブランドを象徴するカラーの「赤」を用い、上品な華やかさを演出し、使うたびに美しくなる予感をかきたてられる新たなデザインに生まれ変わった。

花王

「バスマジックリン泡立ちスプレー」を刷新

花王は8月29日、浴室用洗剤「バスマジックリン 泡立ちスプレー」（4種、本体各380㎖、つめかえ用各330㎖、オープン価格）を刷新する。定番の「レギュラータイプ」、水切れ成分を配合した「壁の防カビプラス」、ピンク汚れにも対応した「除菌消臭プラス」、天然アロマエッセンスを配合した「アロマ消臭プラス」の4種で展開していく。

同社によると、風呂掃除は「時間がかかる」「毎日やらないといけないから面倒」といった理由から、あまり好まれない家事の1つで、特に「浴槽をスポンジでこすること」と「シャワーですすぎ流すこと」の2つの工程を負担に感じている。また、水をたくさん使う風呂掃除では、多くの人が節水を意識している。

そこで今回の刷新では、「汚れをこすらず落とす高い洗浄力」と「すすぎ時の泡消えの速さ」を両立する同社独自の「マジック泡」を開発。高い洗浄力に加え、すすぎが速くなったことで、すすぎ時の水量を約10％削減できるという。

私のH＆B日記

見えざる猫との戦い

小学生のころ、夕食後にとても美味しいビワが食卓に上がった。「この種を植えれば木になって、実がなってビワが食べられる！」と思った私と姉は種を取っておき、次の日、庭に種を植えた。

学校から帰ってくると水をやり、たくさんの芽が出た時には姉と一緒に大喜びで家にいた母に報告したものだ。

期待を一心に受けた芽はすくすくと成長し、10センチほどの大きさにまで成長した。すっかり恒例になった夕食時の報告では、「実をつけるまで楽しみだね」と家族で話していた。

ある日、学校から帰ってくると、芽の数が半分になっていた。

「間引きしないと育たないからね」と母に言われ、植物が成長するために光合成や十分な栄養が必要だと学んだ。

しばらくして徐々に芽が減っていることに気づいた。

母に相談すると、「猫が食べたんじゃない？」と言われ、「ビワの芽を守る！」と決意した私と猫との戦いが始まった。

しかし、私は猫に出し抜かれ続けた。走って帰ってきても芽が減っているのだ。家にいる母に戦況を報告し、悔しい思いをし続け、ついにビワの芽は残り1本になってしまった。

「この子だけは守ってみせる！」と固く心に誓った次の日、学校から帰って来てすぐに玄関でランドセルを降ろし、家の掃除をしている母に「ただいま！」と声をかけて庭へ急いで向かった。

そして、猫との戦いが全敗で幕を閉じたことを悟った。

ふと、この出来事を思い出し、話をしてみると、「あのビワは私が抜いていた」と母が申し出た。

私が相談をしていた相手が例の猫だったのだ。思い返せば、芽が減っているときは必ず母が家にいた。

「まさか本当に芽が出ると思わなかった。ビワは庭に植えると家を割るといわれているので、徐々に抜いていった」と動機を供述した母の犯行によって家は割れなかったが、猫の正体に何も言えなかった。

（黒）